

特集ワイド 安倍元首相銃撃事件を考える



インタビューに答える政治評論家の森田実氏

奈良市内で遊説中の安倍晋三元首相が凶弾に倒れた事件の衝撃はいまだ収まらない。「民主主義の根幹を揺るがす」「市民社会への攻撃」と怒りの声が聞こえてくる中、銃撃事件がこの国の政治や社会に大きな禍根を残すという暗い予感がする。政治の現状や歴史の教訓を踏まえ、事件の深層を考えてみたい。

蛮行、歴史ゆがめさせるな 森田実さん 政治評論家

長い歴史を見ると、暗殺する相手の存在が大きければ大きいほど、1人のテロリストないしはテロリスト集団の行動が歴史をゆがめ、変えていくことがあります。私が生まれた年の1932年に起きた5・15事件や36年の2・26事件では、犬養毅首相や首相経験者らが殺害されました。その後は軍部の暴走を許し、戦争へと突き進みました。60年には、私も何度もお会いしたことがある社会党の浅沼稻次郎委員長が刺殺されました。事件を契機に、55年体制下で自民党が政権を担う一方、社会党は徐々に衰退していきました。

今、政界で一番の有名人は安倍晋三元首相です。「安倍さんの政治信条に恨みはなかった」ということですが、**大物政治家を狙ったテロ**であると私は見ています。民主主義の力、すなわち国民の力で、こうした蛮行が歴史をゆがめることがないようにしなければいけません。

なぜこのような凶行を起こす人物が登場したのか。**容疑者の供述とは別に、シンボリックな社会現象として事件の背景**を考えなければいけない。今は新自由主義が浸透し、競争に勝った人間が幸せになり、負けた人間が不幸になるのはやむを得ないと考える「絶望社

会」になっています。将来に希望を持てない格差貧困社会の一つの傾向として、自ら死のうと思う時に他人を巻き込もうとか、生活が苦しいから犯罪を起こして刑務所に入ろうとか、そんな事件が頻発しています。**この容疑者も社会に絶望し、犯行を起こした側面があるのではないのでしょうか。**

安倍さんが亡くなり、「安倍 1 強」と言われた時代が終わりました。内閣の場合、極論すれば首相が誰であれ、霞が関の官僚の力によって政治を動かすことができる。一方で派閥は、力のある人物がまとめないとバラバラになってしまう。100 人近い自民党最大派閥の安倍派を束ねることができるのは、安倍さん以外にはいません。党内で混乱や分裂が進むでしょう。

安倍さんがご存命ならば、モリカケ（森友学園・加計学園）や「桜を見る会」といった負の問題は批判され続けたと思います。しかし、こういう**非業の死を遂げると、負の遺産を必要以上に問題視する人はいなくなります。それは世の常**です。【聞き手・葛西大博】

命への倫理観、鈍麻懸念 平野貞夫さん 元参院議員



平野貞夫さん = 千葉県柏市で 2020 年、玉城達郎撮影

天気予報を見ようと、たまたま NHK をつけていて、一報の段階から事件を知りました。国会議員、しかも元首相を白昼に銃撃するなんてことは決して許されてはならない。安倍氏が奈良市に入って演説する日程が決まったのは、事件前日の夜だと言われています。急ではありますが、普通の市民にとって選挙期間というのは、政府要人のスケジュールを知る唯一の機会でもある。不審者が要人に近づく可能性があるのだから、十分な警備が必要です。警察だけでなく、地元の自民党県連も含めて、安全確保が甘かったと言わざるを得ません。

どうしてこんな事件が起きてしまったのか。ロシアのウクライナ侵攻の影響も大きいのではないのでしょうか。ロシアが侵攻してからというもの、メディアは戦争の話ばかりを流している。それは結局のところ、人を殺すことについて、あるいは人の命が失われることの重大さについて、我々の常識を壊してしまうことにつながっているのではないかと思うんです。

戦争のニュースを聞いて、本来は人の命が失われてはいけなしと思わなければいけないのに、その倫理観が今、確実に鈍くなっていると感じます。こうした理不尽な暴力が起きることによって、市民の平衡感覚が失われてしまうことに強い懸念を抱いています。

国内を見れば、新型コロナウイルスがまん延し、景気も改善せず、生活不安は消えない。与野党を問わず、今の政治家は何をしているのか。これまでの政治や選挙を見てみると、各政党とも「今だけ、カネだけ、自分（自分の政党）だけ」という身びいきなことばかり言っている。それを見ていれば、政治への期待感が失われてしまう。**事件は、国民の根深い政治不信と無縁とはいえない**でしょう。

容疑者の男が、どういう動機で安倍氏を銃撃したのか。おそらく一つの動機だけではない気がします。**どんな問題があったのか、ごまかさないで、きっちりと真相を解明することが必要**です。それを怠れば、日本の社会はますますおかしくなってしまう。【聞き手・川名壮志】

戦前の不況、背景重なる 小山俊樹さん 歴史学者



小山俊樹 歴史学者 = 本人提供

今回の事件は、戦前の政治家が相次いで狙われたテロを想起させました。しかし、現段階の情報では政治信条による犯行である可能性は低い。**冷静に事件の本質**を考えていくべきです。

犯行形態や背景を見ると、過去に類似する事件があります。選挙期間中に民間人が単身で政治家を狙った点で、**1932（昭和 7）年の血盟団事件**と似ています。国家改造を目指す「血盟団」の一員である茨城県の農村青年らが、政財界の要人を多数狙い、井上準之助前蔵相ら 2 人を射殺しました。事件の背景には、前蔵相の政策が大不況を招いたことがあります。**確かに、今回の事件で政治への不満が動機とは伝えられていませんが、格差拡大や偏った富の分配に不満が高まっている状況は共通**しています。

当時の日本経済を振り返ると、14 年に始まった第一次世界大戦を機に経済が発展する中で富裕層がより豊かになる一方、物価上昇に賃金アップが追いつかず、短期契約の期間工員なども増えて、庶民は苦しみました。この格差を解消できず、やがて不況に突入したことで、政府への不満が高まりました。若者が将来に希望を持ってない社会状況が事件の背景にあったと言えます。

格差社会では、弱者にしわ寄せがいく。現代を見た時、新型コロナウイルス流行での困窮やロシアによるウクライナ侵攻以降の顕著な物価高が頭に浮かび、当時と重なります。また、「アベノミクス」で雇用が拡大したが、非正規雇用も増え、一方で富裕層が潤ったとの見方もあります。

着目すべきもう一点は、当時は政界の大物を狙ったテロが連続したこと。30（昭和 5）年に浜口雄幸首相が狙撃され、32 年の 5・15 事件では犬養毅首相が暗殺されました。その間にも複数の未遂テロが計画されました。同様の事件の続発を防ぐことが重要です。

こうした事件後は社会の分断が起こりやすいことも、歴史が証明しています。**安倍元首相の支持層と不支持層の分断が危惧**されます。安倍政権の評価を建設的な議論につなげるには、時の経過が必要となるでしょう。【聞き手・榊真理子】